

---

# ヴァレンシア戦記

NewWorld

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ヴァレンシア戦記

### 【Nコード】

N6913Z

### 【作者名】

New World

### 【あらすじ】

かつて「不祥事」のために、所属していた騎士団を追放された「元帝国騎士見習いの傭兵」アルス・クライフォード。自然豊かな森の中で狩猟と採集をして暮らす一族「森の民」の少女リユーナ・クローゼス。大陸東部を支配する強大な国家に立ち向かう反帝国組織のリーダー「銀狼」グレイ・ハーバード。運命は彼らを巡り合わせ、やがて大陸東部全体を巻き込む戦乱の陰で暗躍する異形の者との戦いへと導いていく。

タイトルに戦記とありますが、モンスターや魔法じみた武器など

の要素も含むファンタジー小説です。

しばらく更新は不定期です。

## 流浪の傭兵（1）（前書き）

現在連載中の別小説「異世界人と銀の魔女」の更新を優先するため、こちらは可能なときに不定期更新する形となりますのでご容赦ください。なお、こちらは上記の小説と比べ、魔法などのファンタジー要素は低めとなっています。

## 流浪の傭兵（1）

やわらかな日差しが、森の枝葉を鮮やかに輝かせている。

初夏の陽光は、いずれは人々の肌を灼くほどに強くなることなど、微塵も感じさせない穏やかな顔を見せていた。

先日までの雨模様も嘘のように晴れ渡った空の下、森の生き物たちもつかの間の休息を存分に堪能しているであろう。

そんななか、少女は窮地に立たされていた。

「誰か助けて！」

少女の悲鳴は森の中に響き渡るが、彼女を追いつめるもののほか、その声を聞く者はいない。それも当然のことであった。

帝国とルクレールの国境に位置するバロックの森は広大無辺そのものであり、両国を行き来する旅人にしても、森の北と南にある交易路を使えば、わざわざこの森を通る必要はないのだ。

苔の生えた倒木。奇怪に捻じ曲がるようにして地面から露出する木の根。行く手をさえぎるように延びる木々の枝。方向感覚を失いかねないほど規則性もなく、乱立する木立。

そのどれもこれもが、旅人たちをこの森から遠ざける一因となっている。

彼女にとっては歩きなれた森であり、つまづくことはおろか、よるめくことすらせずに走り抜ける自信があった。しかし、追いつめられる精神的な恐怖から、普段ならつまづくはずのない場所で足を挫いてしまうと、彼女の足もとうとうその動きを止めた。

そしてついに、一本の木を背にしたまま、追跡者と対峙することになってしまう。

彼女の周りを取り囲む男たちは三人、いずれも盗賊のたくいとしが見えない連中である。どの顔にも、ある種の期待を込めた下卑た笑いが浮かんでいた。

「いい加減観念したらどうだい。悪いようにはしねえからよお」

男たちの一人が刃の反り返った山賊刀をもてあそびながら言うてくる。

少女はぐつと歯を噛みしめると、男たちをにらみつけた。年の頃なら十七、八か。長めの黒髪を頭の後ろで軽く結び上げているのは、森の中でも動きやすいようにということだろう。やや幼さが残る顔立ちだが、瞳には強い意志の光を宿している。

「まさか、こんなへんぴな森の中でこれだけの上玉にありつけるとはな」

「まったく、ラッキーだぜ」

男たちは口々に言いながら、少女ににじり寄ってくる。

「どっしりよう。どっしてこんなことに……」

さすがに少女も絶望的なつぶやきを漏らす。周囲を男たちに囲まれ、逃げ場はない。これから自分がどんな目に遭わされるのか、そんなことは男たちの目を見れば一目瞭然である。唯一の武器であったはずの弓矢も、逃げる途中でどこかに落としてしまった。

狩りの途中、知らない人間の気配がしたので、森に迷い込んだ人間でもいたのかと、親切心で近寄ったのが仇となった。

まともな職業の人間ではなさそうには見えていたが、最近はこのあたりに盗賊が出没することもなくなったはずだと安心していた。結果、この有様である。彼女は自分の迂闊さに後悔したが、男たちはまたとない幸運に出会えたばかりに醜い喜びに満ちた顔で近づいてくる。

「近づかないで！」

「なあに、怖がることはねえ。一緒に楽しもうじゃねえか」

「なにもとって食おうってわけじゃねえんだぜ？」

どうやら男たちは、少しずつ追いつめ、こちらを十分におびえさせながら楽しむつもりのようなのだ。

はげ頭の男、背を丸めた小柄な男、体格は良いが腹の出た男。彼らは獲物を追い詰めた狼が舌なめずりをするかのように、にやにやと笑っている。

どれも腕の立つ人間には見えないが、非力な少女が武器も持たずにどうにかできるような相手でもない。

まさに状況は、絶望的だった。

「誰か助けて！」

少女はもう一度叫んだ。

「無駄だって。こんなところに誰もきやしねえよ」

と、その時である。

「物騒な世の中になったものだ。こんなところにまで盗賊が出没するとはな」

突然、横合いの茂みのなかから声がかかった。

黒い頭髮に手をつつこんで頭をかきながら、一人の青年が姿を現す。

いかにも気だるげな様子その青年は、二十歳そこそこの若さに見える。それでいて奇妙に落ち着いた物腰をしていて、左腰に下げた長剣もしくりと彼の姿になじんでいる。丈夫そうな衣服の上に簡単な金属製の防具を身につけており、実戦慣れした傭兵を思わせた。

「お願い、助けて！」

少女はすかさず叫んだ。彼女にしてみれば、絶望的な状況における唯一の希望が目の前にあらわれたのである。まさに、藁にもすがる思いであった。そしてまた、盗賊たちもそれに気づいて、青年の方へと向き直る。

「何だ？ てめえは。死にたくなけりゃ、あっちへいつてる！」

盗賊たちの一人がすごみをきかせて言い放ったが、青年はそれを無視する。

「助けてやらないこともないが、いくら出す？」

実に淡々とした口調であり、一瞬その場にいた誰もが、青年の言葉の意味を理解できなかつた。啞然とした空気の中、真っ先に我に



返ったのは、声をかけられた当の少女である。

「ちよ、ちよっと！こんな状況で何言ってるのよ！」

「ただ働きはしない主義なんだ」

「わ、わかったわ！ お金ならいくらでも出すから、早く何とかして！」

ここへきて、さすがに啞然としていた盗賊たちも黙ってはいられなくなつた。三人のうちの一入、小柄な男が山賊刀を青年に突きつけ、詰め寄っていく。

「てめえ、俺たちを無視すんじゃないねえ！ だいたい一人で俺たち三人にかなうとも思ってるのかよ。ああ？」

「三人？ ……二人の間違いだろう？」

言うや否や、抜き打ちざまの剣閃が盗賊の肘のあたりを切り払つていた。その場にいた誰もが、一瞬、何が起こつたのかわからないほどの早業だつた。

「うぎゃあ！」

一撃で肘の腱と神経を切断されたその男は、腕を押さええてうずくまつた。

よほど運がよくない限り、二度と元通りには動かせなくなるほどの深手である。

青年はうめくその男を横目に、残る二人と対峙した。この時点で三対一が二対一なつたわけであるが、依然として不利であることに

は違いない。そもそも一人で複数を相手に勝つには大きな実力差がなければならぬ。

しかし、この青年には恐怖や不安の色など影も形も見えなかった。相変わらず落ち着いた物腰のままであり、これから命のやりとりをするのだという気負いすら見受けられない。己の腕によほどの自信があるのか、はたまた死を恐れていないのか。

「く、よくもやってくれやがったな！」

「ぶっ殺してやる！」

二人の盗賊たちは、一瞬の驚愕から立ち直ると、手にした武器を構えた。

さすがに荒事に携わっていることだけあって、彼らにもそれなりの戦闘経験はあるらしい。じりじりと間合いを測るよう青年との距離をつめていく。

しかし、当の青年は、さして関心もなさげに目を細めるのみだ。一応武器こそ構えてはいるものの、なにもかもがどうでもいい、そんな投げやりな印象すら受ける。

「ち、畜生、なめやがって！」

「覚悟しやがれ！」

残る二人は青年の態度に怒ると同時に不気味さを感じ、それを振り払うように威嚇の声をあげながら一気に斬りかかった。

交錯は、ほんの一瞬のこと。

青年は、身体を揺らすような緩慢な動きから一転して加速する。鮮やかな身のこなしで二人のうち片方の側面に回りこむと、敵の姿を見失つてうろたえる男の首筋を切り払った。そのまま倒した相手の身体をもう一人に向けて蹴り飛ばす。続いて青年は、かがみこむように身を深く沈めていた。ぶつかられて体勢を崩すその盗賊は、仲間の身体に遮られて彼の姿を見失う。その隙について青年の剣は、鋭くその胸元へと吸い込まれていく。

声もなく絶命する二人の盗賊。

二人の人間の命を奪ったことに何の感慨も覚えないのか、特に表情を変えぬまま、青年は肘を切られてうずくまったままの男の方へと歩み寄る。

しかし、すでにその男は戦意を喪失していた。

「ひ、ひい！殺さないでくれ！」

男はガクガクと膝を震わせながらもどうにか立ち上がり、腕を抱えたまま大慌てで逃げていく。

その姿を見送り、青年は軽いため息をついたようだった。その表情からすれば、それは安堵からものには見えない。何か別の不満があるかのようなため息である。

助けられた少女の方はといえば、目の前で剣の血を拭う青年の姿を呆然と見つめていた。

助けてもらったことはともかくとして、よもやこんな凄惨な光景が繰り広げられようとは思ひもしなかった。ましてや、当の青年は人を殺した後だというのに、いたって平然としているのである。きれいに整った顔立ちの青年ではあるが、外見だけで判断できないものを持っているようであった。

そして、なにより心配なこともある。

「あの、助けてくれて、ありがとう。実はその、言いづらいたけ  
ど……」

「ああ、金のことなら気にしなくていい」

青年はあっさりそう言っていると、こちらに背を向けて歩き出した。

「ま、待って！」

少女は思わず青年を呼び止めた。金が目当てでないのなら、何の見返りも求めずに自分のために命をかけてくれたことになる。いかに素性のしれない青年とはいえ、このまま行かせてしまうことなど少女の性格からいって、できなかった。

「でも、助けてもらったんだもの、何かお礼をしなくちゃ……」

「構わないと言ってるだろう」

「で、でも……」

少女がなおも言いつのると、青年は少し困ったような顔をした。そうすると、先ほどまでとは違ってかわった若者らしい表情になる。

「こちらが必要ないと言っているんだ。それでいいじゃないか」

「駄目！ だってあなただって、危険な目にあっただじゃない。なの  
に何もお礼ができないなんて……そんなのないわ」

青年は、あきれたような顔になった。

「つまり俺は、君ができそうなお礼を考えなくてはならないわけか？」

「え？ いや、えっと……」

今度は少女の方が困った顔になった。青年は軽く苦笑すると口を開いた。

「……そうだな。このところ、ろくなものを食べてない。何か食料を持ってないか？」

すると、少女はにっこり微笑んだ。

「それなら、家でご馳走するからついてきて！」

「いや、そこまでしてもらう必要は……」

「ろくなものを食べてないんでしょ？ 栄養はちゃんととらなきゃ駄目なのよ？」

少女は、子供に言い聞かせるような口調でにっこりと笑う。

「……」

そのまま少女は歩き出し、青年も少しためらったあと、仕方なくその後についていこうとする。が、突然少女が突然立ち止まる。

「そう言えば、あなたの名前を聞いてなかった。私はリユーナ。リユーナ・クローゼスよ」

「俺はアルス。……アルス・クライフォードだ」

名乗るとき、彼はわずかにためらいを見せた。そのことにリユーナも気づきはしたが、特に気にも留めない。ゆっくり手を差し出して、握手を求めた。

「よろしく。アルス」

ヴァレンシア帝国。大陸暦一〇〇三年の現在では、ケルソネソス大陸東部でも随一の大国であり、東部域中央部で他の国家群を東西に二分するような形をとっている。

かつてこの東部域においてもっとも強大な国家は、現在の帝国とバルツクの森を挟んで西に国境を接するルクレール王国であった。

しかし、二十四年前、当時は一小国に過ぎなかった帝国に、一人の英雄が皇帝として即位したことから、状況は一変した。

彼はたぐいまれなる軍事的才能でもって周辺諸国を侵略し、その巧みな政略は何度となく築かれようとしていた反帝国同盟を瓦解させ、ついには一代にして未曾有の大帝国を出現させるにいたったのである。

彼はまた、国力の増大のために貿易にも力を注ぎ、帝国の北部と南部にそれぞれ一つずつ東西を結ぶ交易路を整備し、大陸東部全体の活性化にも多大な貢献を果たした。

帝都であるストラウムもまた、北の交易路沿いに位置する重要な

交易拠点としての繁栄を誇っており、活気に満ちあふれた東部一の大都市といえる。

その帝都の中央に位置するストラウム城は、堅固な城壁に囲まれた難攻不落の名城として名高い。

そして今、その城の謁見の間へと続く廊下を一人の男が歩いていた。均整のとれた肉体に一分の隙もない足取り。その身にまとうのは、高級軍人しか身につけることの許されない立派な模様の入った正式軍装であり、腰に下げられた剣も実用と儀式式典用を兼ねるところまでできそうな一品ものである。

黒い頭髪に同じ色をした鋭い眼光、きれいに切りそろえられた口髭を持った騎士。これだけの特徴を並べ立てれば帝国の、いや東部の誰もが連想する名前は一つだろう。

石造りの廊下には赤い絨毯が敷かれているが、男の規則正しい足音はこつこつとあたりに響く。

皇城で働く使用人たち、兵士たちが彼のそばを通り過ぎるたびに頭を下げて敬意を示してくる。無論、彼らの身分からすれば大概の貴族、軍人に対しては同様の振る舞いをするのは当然だろう。

しかし、男に会釈する彼らの表情は、憧れの有名人に期せずして遭遇してしまった興奮のようなものを感じさせる。

謁見の間の入り口まで着いたとき、彼の姿を認めた衛兵たちはうやうやしく一礼すると、尊敬の念を込めたまなざしで彼の後ろ姿を見送った。

謁見の間の玉座には、一人の男が座っている。他者を圧さずにはいられない、威厳と覇気を身にまとうこの男こそ、帝国皇帝にして大陸の覇者、ガールランド・ヴァレンタインその人である。

灰色がかった頭髪と深みのあるブルーの瞳。だが、とても齢五十

に手が届いているとは思えないほどのエネルギーを感じさせる。

「バロウか。まさか、帝都に向かってきていたとはな。入れ違いでヴァイスブルグに早馬を出してしまったところだ」

その声は、謁見の間に重く響く。

「陛下におかれましては、ご健勝のご様子で何よりです」

バロウと呼ばれた騎士は、そう言って一礼した。彼は自らが騎士団長を務める第二騎士団の騎士団領であるヴァイスブルグから離れ、ちょうどこのストラウムに出向してきていた。

この帝国には皇帝直属の騎士団が五つある。かつては騎士団のある地名でもって呼ばれていたのだが、度重なる領土の拡張とそれに伴う騎士団の移転のために、第一、第二という単純な名称が使用されることとなったのである。

五人の騎士団長はそれぞれが英雄と呼ばれるにふさわしい実力と名声を保持していたが、その中でも第二騎士団長バロウ・クライフオードは、とりわけ平民や騎士たちにとっての憧れの的である。

類稀なる剣の達人であり、その腕だけで、ただの平民から栄えある帝国の騎士団長の地位にまでのぼりつめた「大陸最強の騎士」。  
いまだ、四十四歳にして、その腕前にはいささかの衰えすら見えていない。

「今回の召集に関しては、他でもない。近いうちにルクレールへの攻撃を開始しようと思つてのことだ。詳細については軍議の中で決めていくつもりだが、今度の攻撃はこれまでにない大規模な、そし



て最後のものになるだろう。承知しておいてもらいたい」

いたって平然とした皇帝の言葉に、バロウの顔色がわずかに変わる。

「陛下。恐れながら申し上げます。ルクレールへの攻撃、時期尚早ではございませんでしょうか」

バロウは大胆にも皇帝に苦言を呈した。君主に対する反論は、時として命取りになりかねないものである。ガーランドはそうした点に厳しい君主ではないが、それでも生半可な度胸でできることではない。

「先の戦いから三年以上になる。時期尚早と言つこともあるまい」

皇帝は気分を害した様子もなく、そう言った。

「し、しかし……」

バロウはなおも言いつのろつとしたが、皇帝がそれを遮った。

「おまえが言いたいことはわかっている。国内の貴族のことならば手を打っておく」

皇帝は、はっきりした口調で断言する。実際、バロウが危惧しているのも、長く続く戦乱に飽いた領主貴族たちが不満を募らせているからなのである。

「そうですねか。……差し出がましい口を利き、申し訳ございません」

「構わん。ルクレールさえ陥落すれば、東部統一は目前となる。三年前の戦は、きっかけがきっかけなうえに準備不足の状態が始まったものであったからな、中途半端に終わってしまったが……。今回は十分な準備を整えて行く。お前たち騎士団長の働きにも期待させてもらおう」

「はっ……。微力を尽くさせていただきます」

「そうそう、三年と言えば、おまえの息子のことだ。あれからもう三年になる。ほとぼりも冷めたであろうし、呼び戻したらどうだ？」

「……それが陛下の御意なれば」

バロウは息子の話題となると、極端に口数が少なくなる。それが騎士団で不祥事を起こした息子へのあきらめの気持ちからなのか、それとも父親である自分が余計なかばい立てをするのは立場上よくないと考えてのことなのか。

「まあ、よい。今度の戦については他の騎士団長も交えて細部にわたる検討を行いたい。早馬を出しておいたから、全員が集まるまでは待機していてくれ」

バロウは皇帝の言葉にかしこまりましたと一礼すると、謁見の間を退出した。

## 流浪の傭兵（2）

リユーナと名乗った少女の後ろを歩いていく道すがら、アルスは彼女の様子をそれとなく観察していた。

律動的で活発さを感じさせる足取り。後ろで束ねられた黒髪がまるで動物の尾のように揺れている。遠い昔に自分が失ってしまった、生きるための活力とでもいふべきものを豊富に備え持っているような少女。

しかし、それよりも気になったのは、彼女の素性である。ここは交易路からはずいぶん離れた森の中だ。こんな年頃の少女がいるには不似合いな場所といえる。

ただ、彼女の着ているものは、森の中での活動に適した動きやすく丈夫そうな衣服である。弓こそ手にしてはいないものの、矢筒を背負い、弦を引く指を保護するための装具をつけている姿からすれば、まさに狩人そのものといった出立ちだ。

アルスには、思い当たるところがあった。

「ひょっとして、君は『森の民』なんじゃないのか？」

「え？ ああ、外の人にはわたしたちのことをそう呼ぶみたいね」

アルスの問いかけに、リユーナはあっさり答えた。

しかし、これですますますアルスの抱く疑問は深まってしまった。

『森の民』とは本来、森の中で暮らす一族を指す名称だが、彼らの生活は総じて貧しいものだったはずだ。

彼らは、領主貴族のもとで様々な封建的束縛を受けて暮らす農民たちとは異なり、農作物の納税などの義務を負っているわけではない。そのかわり、彼らはいっさいの人間としての権利を認められておらず、ただ森の材木を切り出し、それを領主の元に運び込むことのできるうじてその土地に住むことが許されているだけなのである。

対外的な商売のたぐいも認められず、彼らが生きる糧となるのは森でとれる獣や木の実、それにわずかばかりの畑でとれる収穫物だけという有様である以上、よそ者を集落に案内するほど友好的でもなければ、食料を分け与えてやるほど裕福でもないはずなのだ。

ところが、目の前の少女には、いじけたところが少しもなく、貧しい生活を送ってきているようにも見えない。それどころか下手な農民などよりも、よほど教養があるようにすら見える。

「アルス。なに、ぼーっとしてるのよ？　ここが私の村よ」

リユーナの声に考えごとを中断させられたアルスは、彼女の示す方に視線を向けた。なるほど、確かに人の住む集落がある。その外観もおおむねアルスの想像どおりだ。

つまり、森の中を切り拓いて広場を設け、その広場を囲むように十数件の家々が立ち並んでいる、といった風景である。

しかし、意外にも本来なら村人同士が交流する場となるはずの広場の中心に、二階建ての大きな屋敷が建てられている。

リユーナはアルスについてくるよう促すと、立ち並ぶ家の一つへと歩いていく。どの家にも周囲に小さな畑がある。しかし、これではたいした収穫は望めまい。

数人の村人達が外に出ており、畑や井戸で作業をしているようだったが、リユーナの姿を見かけると、気さくに声をかけてくる。

アルスのことに気付いた村人の問いに、リユーナが事情を話すと、なにやら複雑そうな顔をしていたが、早く父親のところに行つてやりなさいと氣遣わしげな様子を見せた。

やはり、よそから人間とみなされないような扱いを受けることが多いためか、村人同士の連帯感や仲間意識は強いようだ。そして、その中でもリユーナは特に大事にされている。そんな印象を受けた。

やがて、目的の家の前までつくと、リユーナは勢いよく扉を開けた。

「お帰り。今日は何を獲ってきた？」

中から男の音がする。声の主は四十歳ほどの男性であった。

「ただいま、お父さん。今日は色々あつて狩りどころじゃなかったの」

そう言つてリユーナは中へと入っていく。アルスがどうしたものかと戸口のところまで立ちつくしていると、リユーナの父はそれに氣づいたらしく、げんなりした顔をした。

「失礼ですが、どちらさまでしょうか」

言葉遣いといい、態度といい、まったくそれまでアルスが抱いていた『森の民』の印象とはかけ離れた品のある人物のようだ。そこへすかさずリユーナが割つて入る。

「このひとはアルス・クライフォードさん。森で盗賊に襲われそう

になったわたしを助けてくれたひとよ」

「お、襲われた？ いったいどうということなんだ！」

突然、リユーナの父は血相を変えて叫んだ。

「やあねえ。そんな大げさに考えないでよ。幸い何事もなく無事で済んだんだから」

リユーナがあきれたように笑った。いかにも仲の良さそうな親子である。アルスは思わず、胸に小さな痛みを覚えた。よほどに娘のことを溺愛しているのだろう、リユーナの父はまだ顔を青ざめさせている。

自分の父は、どうだろうか。自分のことを今もなお、心配してくれているのだろうか。しかし、自分は心配してもらうに値しない人間なのだ……。そんなことが胸をかすめたためか、アルスはリユーナの父がつぶやいた言葉を聞き逃していた。

「どうということなんだ。話が違う……」

「え？ なんのこと？」

代わりにリユーナが聞き返すも、男性は軽く頭を振った。

「い、いや何でもなし。それより無事でよかった。アルス殿にも礼をいわねばならんな。申し遅れましたが、私はジム・クローゼス。この娘の父です。今日は娘を助けていただいたそうで、本当にありがとうございます」

「いえ、たいしたことではありません。お気づかいなく」

丁重に礼を言うジムに言葉を返しながら、アルスは家の中を見回してみた。

木のテーブルに木の棚など、ほとんどがこの森でとれる木材を使って作られた家具だ。ただ、そうした調度品のなかには、この家に似つかわしくないような高価なものも混じっているようである。

「これから、アルスにお礼のごちそうをしようと思っているんだけど……」

「それはいい。だが、これからどうしても外せない来客があってね。屋敷の方を使ってくれないか。少し遅れて私も行くから」

「うん。わかった」

うなずくと、リユーナはアルスを伴って家を出た。

「屋敷ってあの村の中心にあるやつのことか？」

「ええ、そうよ。いつもは村に大事なお客さんが来たときとかに使ってるの」

リユーナの言葉に、アルスは首をかしげた。

『森の民』は外部の人間とは、一部の物々交換を別にしてほとんど接触を持たないはずである。客が来るとは、それもリユーナの口ぶりからすれば、しばしば訪れているとはどういうことか。

「ここは普通の『森の民』の村とは違うのだろうか？

それとも、そもそもアルスが持つ『森の民』に関する知識が誤っているのか？

「それじゃ、これから鍵を開けるから、ちょっと待ってて」

屋敷の扉は立派な造りをしており、金属の鍵穴までついている。

こんな小さな村には不似合いな代物だ。なにやら気になるものを感じたものの、弾むような足取りで中に入っていくリユーナにそんな質問をする気にはなれない。

そこでアルスは、屋敷の食堂でリユーナの用意してくれた料理を食べながら、遅れてやってきたジムに尋ねた。

「ジムさん。それにしても、この屋敷はずいぶん立派なものですね」

「いやあ、実は私どもの村は、よその『森の民』の村と違って外人との交流を盛んにしているんですよ。それで、やってきたお客さんに安心してくつろいでいただけるようにと村人総出で建てましてね」

ジムの口からは、立て板に水が流れるようにすらすらすらと言葉が出てくる。とても嘘をついているようには見えない。

「そうそう。それ以来、この村のなけなしの食料目当ての盗賊も現れなくなっただしね」

しかし、リユーナのこの一言で途端に顔色が変わってしまつ。



「ま、まあ、被害が我々のみならず外からの人にまで及ぶとなれば、領主様も黙ってはいないでしょうから、盗賊どももそう考えたのではないでしょうか」

あわてて言いつくろうが、なにやら様子がおかしい。

しかし、アルスにとって、そんなことはどうでもよいことだった。たとえこの村にどんな事情があつたとしても、ただの傭兵でしかない自分が立ち入るような話ではない。

と、思っていたところへ

「とはいうものの、今日のようなことがあると不安で仕方がありません。それでその、申し上げにくいのですが……」

「何でしょう?」

ジムがなにやら言いにくそうにしているので先をうながすと、彼は意を決したように切り出した。

「あなたのお力を見込んでお願いがあります。どうか、盗賊どもを退治してはいただけませんか?」

「お父さん! 何言ってるのよ。アルスにそんなこと言ったって……」

リユーナは突然のジムの言葉に驚いて声を張り上げた。

「あ、ああ、そうだな。濟まない。つい余計なことを。……やつらは自分たちのことを『赤の狼』であると名乗っております。国中を荒らしまわる凶悪な盗賊団ですし、申し訳ありません。無理なお願

いをしてしまいました。忘れてください」

ジムは娘の声で慌てて我に返ったかのように言い繕う。

一方のアルスは首をかしげて考える素振りをしていたが、やがて口を開いた。

「『赤の狼』といえば、このところ噂になっっている盗賊団ですね。それなら第五騎士団に訴えてみたらどうでしょうか？ あそこの騎士団長ならこんな事態を放っておくはずがありませんから」

しかし、ジムはその言葉にも首を振った。

「我々は『森の民』です。騎士団が動いてくれるはずがないではありませんか！」

「カルロス団長はそんな差別をするような人ではありません」

「あなたはわかっているのです！我々がどんな差別を受け、地べたを這いつくばるような生活をしているかなど……」

ジムの様子は明らかに先ほどまでと変わっていた。リユーナとは違い、よほどに「森の民」の置かれている状況に不満があるのか。

「お父さん……」

がつくりとうなだれるジムにリユーナが気遣わしげな声をかける。沈黙がその場を支配するなか、アルスが軽く息をつくようにしてから言った。

「わかりました。俺一人でどこまでできるかわかりませんが、引き

受けましょう」

「そんな！ 無理に決まってるじゃない！ 一人でなんて」

思いがけないアルスの言葉に、リユーナは激しく反対した。しかし、アルスは軽く笑って答える。

「問題ない。やりようはいくらでもある」

そう言い切れるだけの根拠など、まったくない。

規模の知らない盗賊団を自分ひとりで壊滅させられるなどと考えるほど、アルスは自信家なわけでもない。だが、依頼として引き受けたなら、これはもう自分の『戦い』だ。アルスにとってはそれだけで充分だった。勝ち目など、むしろ無い方がいい。

「駄目よ！ こんなことでアルスが死んじゃったら、わたし、どうしたらいいか……」

「俺は傭兵で、依頼を受けたただけだ。君が責任を感じることにじゃない」

確かにリユーナに連れられてこの村に来たことが発端だとはいえ、自分で選んだことだ。しかし、リユーナは首を振った。

「そんなの関係ないじゃない！ わたしはアルスに死んでほしくないの……」

「……」

アルスは言葉を失った。『死んでほしくない』とは、死ぬために

生きているような自分には実に相応しくない台詞だ。滑稽ですらある。

それなのに、なぜこんなにも心を打たれるものがあるのか。知り合ったばかりの少女。その彼女が恩義を感じている自分を心配して言った、ただそれだけの言葉。

「だから、無茶はしないと約束してくれる？ 盗賊なんて退治できなくても、生きて戻ってきてくれれば、それでいいから」

「……ああ。約束する」

今、わかった。言葉のためではない。心の底から自分を心配している瞳。どうして会ったばかりの人間をそこまで、と思うほどの真剣な眼差し。

どこまでも自分とは違う。それは、生きることの意味を何よりも知っているからこそ、なのかもしれない。そう思った。だからこそ、果たすつもりのない約束を 果たせるはずのない約束を、してしまっただのだ。

ジムはといえば、まさか引き受けてもらえるとは思わなかったのか、驚いた顔をしており、むしろ戸惑っているようですらあった。

「本当ですか？ も、もちろん謝礼はできる限りお支払いいたします。……い、いや、本当にありがたい話です」

リユーナはなおも心配そうな顔をしていたが、アルスは心配いらないと告げると翌日の朝には早速村を出た。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6913z/>

---

ヴァレンシア戦記

2011年12月24日08時51分発行